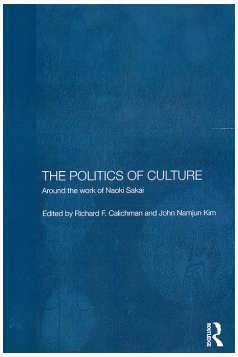
書評

リチャード・カリッチマン、ジョン・キム編

『文化の政治学——酒井直樹の仕事をめぐって』

Richard F. Calichman and John Namjun Kim, eds. *The Politics of Culture: Around the Work of Naoki Sakai*. Routledge, 2010

三原芳秋



「酒井直樹」と〈Naoki Sakai〉——その字面から受ける印象には、ずいぶんと違いがある。本書は、その〈Naoki Sakai〉の方の仕事をめぐる（around）論文集である。さすがに弟子筋の中堅二人による編集だけあって、巻頭の序文は簡にして要を得た申し分のないもので、さらに巻末の編者二人によるインタビューは、師弟ならではの信頼と無遠慮を感じさせる、なかなか読みごたえのあるものになっている。なお、所収の各論文については、序文に丁寧な要約（八〜一六頁）があるためそちらに譲るとして、紙幅の関係からも本書評では序文とインタビューのみを中心に論じることをあらかじめことわっておく。

同様の企画が日本で——つまり「酒井直樹の仕事」をめぐって——とくに「日本研究」の界隈で立てられたとしたらどうなるだろう、とふと考えてみる。おそらく一九八七年の「ボストン会議」[1]あたりから語り起こし、黒船よろしく太平洋の向こうから忽然と現れたハリー・ハルトゥーニアン率いる「シカゴ・マフィア」の若頭が、その後いかにして日本における「日本研究」の鎖国状態に風穴を開けたか、というような書き出しになるだろう（「風穴」は、しかし、「ガス抜き」かもしれず、本来は館をまるごと吹き飛ばすはずだった爆風をうまくやりすごした、ということかもしれない）。とはいえ、この界隈でのその後は「出会い損ね」の感が否めず、むしろ別の界隈で、すなわち「カルスタ」「ポスコロ」（最近は「グローバル」云々）の唱道者たちによって、「酒井直樹」はひとつの

「制度」の地位にまで高められた、というようなナラティヴになるだろうか。そして、論集全体としては、酒井直樹が先鞭をつけた帝国／国民主義批判やさまざまなマイノリティ言説分析の「応用編」といったものになるだろう。

そう考えると、この書評で扱うNaoki Sakaiをめぐる本論集は、少々予想外なものと映るかもしれない。こう言ってよければ、あまりに「哲学的」なのである。たとえば、序文で編者たちはこう言っている――「Sakaiの仕事において、対―形象化［の図式］は、西洋―東洋という言説の二項対立に関して典型的に把握されるものだが、ここで強調しておかなければならないのは、この概念は、何よりもまず形式的・論理的な要請に応えるものであって、そのようなものとして有効な道具なのであり、その応用の範囲は決して文化の分析に留まるものではないということだ」（四頁、傍点は評者）。つまり、「Naoki Sakaiの仕事」とは、《社会性（sociality / the social）》の問題をあくまで「形式的・論理的」に探究したものであり、その論理の要請に応える文化／政治批判の成果として「カルスタ」「ポスコロ」への接続（応用）がある、ということだ。なぜ《翻訳》、それも個々の翻訳行為ではなく翻訳の「表象」が問題になるのかというと、「話し手と聞き手の間にもともとあった非連続性を連続化し認知可能なものとする実践」（『日本思想という問題』）である《翻訳》は、あらゆる社会編制に内在する非共約的な差異を「表象」のレベルで種差へと回収――「根本的社会性」を排除[2]――し、社会を均質化する実践の範例[3]であると考えられるからである。ここで、カントの超越論哲学に由来する「図式（schema）」が召喚されるのは、決して単なる衒学趣味による虚飾ではなく、この「表象」（「翻訳の実践系［regime］」）が成立するための条件を原理的に思考した結果であることは言うまでもない。このような「（基礎づけの）理論」へのこだわりは、キム論文・ソロモン論文に最も顕著に表れているが、その他の寄稿者も含め本論文集全体を貫く通奏低音と言ってさしつかえないだろう。翻ってみると、このNaoki Sakaiの「哲学的」な《起源》が、「酒井直樹」として日本に《翻訳》された際に（どこかの時点で?）回避（around）されてしまったのではないのか、という疑念が生じてくる。「酒井直樹」という表象の図式をこそ、われわれは脱構築しなければならない。

通奏低音は、巻末インタビューにおいて、よりはっきりと鳴り響いてくる。二人の編者カリッチマンとキムは、今後おそらく「酒井直樹論」が書かれるたびに繰り返し言及されるであろう重要な発言を、本人の口から引き出している――

> わたしの最近の仕事において、かつての脱構築［的手法］から離れて、歴史的つまりリージョナルな対象へのシフトが見られることを、わたしは認めます。ただし、「リージョナル

（regional）」というタームの意味については限定が必要です。「リージョナル」は［「地域研究」が言うところの］「地域（area）」とは明確に異なるもので、歴史性がリージョナルであることを要請する、すなわち、歴史性を有する発話（［フーコーの言う］*énoncé*）は必ず他の発話や事物との関係性のうちにあらねばならない、というのがリージョナルの意味するところです。（中略）わたしは、分散可能なある特定の言説――とりあえず「同時代性（contemporaneity）」[4]と呼んでおきましょう――を見つけ出したいと思っているのです。それが見つかるのは、西欧かラテンアメリカか東アジアか、はたまた複数の場所の組み合わせのうちになのかもしれません。「同時代性」とは、分散した発話同士の接続を可能にする様式のことで、全地球的に当然視されてきている歴史的条件を疑問に付すような一連の問いの組み合わせが同じ格好となるに際して、それらの問いに［相異なる地点で］応答することと考えられるかと思います。ただ、それはあくまで特定の場所と歴史を有するものなのです。そこでわたしは、哲学的な立論を、この種の neighborhood に結びつけることによって、リージョナルなものとしたい（make it regional）のです。（一三八頁）

この〈neighborhood〉という単語には独特の意味が込められていることに、注意が必要である。というのも、続く発言のなかで、植民地台湾の知識人たちと『ノー・ノー・ボーイ』に描かれたアメリカ合州国のアジア系マイノリティたちという地理的にまったくかけ離れている人々を指して、彼／彼女らは「同時代人」であり「同じ neighborhood に属している」と明言されているからである。つまり、ここで言う《隣人》性とは、地域研究の「地域」が想定する地理的・空間的なそれではなく、相同的な言説への参与＝分有（participation）の度合いを指しているのだ。Naoki Sakai が米国における地域研究批判に精力を傾けていた初期の活動では、「地域」内部の均質的な表象を可能にする図式を剔抉しこれを脱構築することに重点を置いていたのが、だんだんと、歴史性を有する特定言説の「同時代的」分散を主題化し、ヴァーチャルな意味での〈neighborhood〉を見出すという「リージョナル」なアプローチへと「シフト」してきていると、とりあえずはまとめることができるだろう。[5]

その意味で、この論集に収められている各論文は、同じ〈neighborhood〉に属していると言えるだろう。扱われる主題は、「のらくろ」の生―政治（ラマール論文）から《共（コモン）》の存在論（ヘイバー論文、メサドラ論文）まで多岐にわたり、また、Naoki Sakai の対話相手として召喚されるのも、夏目漱石（ボーダッシュ論文）・多和田葉子（ド・バリー論文）からサイード（ネイラート論文）・ア

ガンベン（ソロモン論文）まで古今東西無造作に散らばって見えるが、みな、Naoki Sakai がそもそもの始めより抱いていた「哲学的直観」――「文化的、自民族中心主義的な閉域としての内部性は、私の研究方法に対する不断の脅威となっている」（『過去の声』）――を共有しつつ、その直観をそれぞれが《リージョナル》なものとしているのだ。逆に、「日本研究」が「日本」という閉域の内部性にひきこもり、「均質言語的な聞き手への語りかけの構え（homolingual address）」に終始するならば、たとえ「外国人研究者」を何人集めようと、この〈neighborhood〉の住民たちと《出会う》ことは決してありえないだろう。必要なのは、かくも小さき共同体の心地よさを「不断の脅威」と感じ、《根本的社会性》に徹底的に身をさらすこと――「つねに異（邦）人として、異（邦）人に対して語りかける」という博打のうちに《倫理性》を見出すこと――であろう。

「酒井直樹」を制度として頂戴するのでも敬遠するのでもなく、稀代の賭博師 Naoki Sakai の向こうを張って《リージョナル》に博打をうつことへと読者を誘う……これは、遠くて近い《隣人》たちによる誘惑の書である。

注

（1）『現代思想』（青土社）一九八七年十二月号「総特集＝日本のポストモダン」に収録。

（2）酒井直樹は、その処女作においてすでに、伊藤仁斎の「愛」の理念に託して《社会性》の論理＝倫理を提示している――「倫理的行為の倫理性は、根本的社会性（the fundamental sociality）――たがいに異質な個人としてのわれわれは、その社会性を通じて、歴史のなかで交渉し合いながら生きている――と同義語である。偶然＝博打的（aleatory）な行為によって、わたしは自身を他者へと開く――言説においてあらかじめイメージが決定されている主体としての他者ではなく、相互関係が生じることをはなから想定してかかることが決してできないような独異的な《他》者（Other singular individuals）へと」（*Voices of the Past*, p. 109、拙訳）。

（3）「翻訳は、書かれた言葉に限定された作業ではなく、社会行為一般をあらたな視座からみせてくれる概念であり、社会性の考察へのかけがえのない入り口を提供してくれていると考えてよい」（「翻訳というフィルター」『岩波講座　哲学15　変貌する哲学』、一八三頁）。

（4）この〈contemporaneity〉というタームは、少しあとに〈coeval simultaneity〉という表現に置き換えられている。ここにヨハネス・ファビアンとウィリアム・ヘイバーの理論の反響を聴きとることは、正当だろう。

（5）この「シフト」を、編者たちは、デリダからフーコーへの比重の移動と見なしているようだが、評者はむしろ、ドゥルーズ的思考の影響＝情動（*affect*）の一貫性を見出している。この点については、稿を改めて論じたいと思う。